

「信州 知の連携フォーラム(第5回)」参加報告

『信州の未来を担う世代に、地域資源(史資料)の大事さ・魅力をどう伝えるか』

萩原 泰子 (信州大学中央図書館)

羽生 将昭 (信州大学繊維学部図書館)

1. はじめに

2021年11月11日(木)に「第5回 信州 知の連携フォーラム」が開催された。

「信州 知の連携フォーラム」は、長野県における知と学びに関わる各種の文化施設(博物館、美術館、図書館、文書館などのいわゆるMLA)が、信州における価値ある地域資源の共有化をはかり、新たな知識化・発信を通して、地域住民の学びを豊かにし、地域創生につなげていく方策についてフロアを交えて語り合う場として、2016年に発足した。

第1回は2016年12月、第2回は2018年2月に信州大学中央図書館で開催され、県内文化施設の館長・部長らの講演やトークセッションが行われた。以降は県内の文化施設がリレー形式で企画・運営を担うこととなり、第3回は2019年3月に信州大学附属図書館が主催となり、寺院資料を題材に体験型のプログラムが、第4回は2020年9月に県立長野図書館が主催となり、各地域・各館からの情報発信を可能にする信州ナレッジスクエアについての講演とワークショップが実施された。なお第4回は、新型コロナウイルスの流行を鑑み、Zoomを併用し7か所の会場をつないで開催された。

今回は長野県立歴史館が主催となり、「信州の未来を担う世代に、地域資源(史資料)の大事さ・魅力をどう伝えるか」をテーマに以下、2つの報告が行われた。

基調報告 未来の若者たちに史料を残すということ

講演 村石正行氏(県立長野歴史館 文献史料課長)

実践報告 こどもたちに地域の歴史を伝えたい～おでかけ歴史館

講演 宮坂到氏(県立長野歴史館 総合情報課専門主事)

本稿では第5回フォーラムについて、参加者の視点より報告する。

2. 若者に古文書を残すということ

2-1.ブレインストーミング

はじめに述べられたのが、そもそも「古文書を読む人＝年齢層が高め」というイメージがあるという点である。持続可能な地域資源として古文書を継承していくためには、若者にも古文書に親しんでもらう必要があるが、歴史用語などの前提知識を必要とする点から大人になって興味を

持つものと「勘違いされている」ということを、実際に古文書の複製を用いて解説された。複製による解説では、文章の内容が読み解けなくとも、古文書の紙の使い方・折り目・封の仕方などからどのような文書か想像可能であると分かった。内容についてもそもそもヨミカキは普通の子どもたちが寺子屋で学んでいたものであり、「古文書は大人になってから読むもの」というのは思い込みであると述べられた。筆者自身、古文書を読み解くには専門的な知識が必要であり、敷居の高いものであるという先入観があったことに気付かされた。古文書に興味を持つ子どもたちに現物に触れる楽しみを提供することで将来の継承者を掘り起こすという考えは非常に重要になってくる考えだと納得できた。

2-2. 危機 流出する「私文書」と「公文書」

横田冬彦により提唱された地域史研究における危機として、①流出・散逸による資料そのものの危機と、②歴史学全体のアカデミズム化・現代社会からの遊離による若い世代への継承ができなくなる危機の二つが紹介された。前者は台風などの自然災害に限らず、所蔵者や地域社会の無関心による資料の散逸（平時の災害）が発生していることが実際の事例とともに紹介された。後者については、地域史研究団体が高齢化や会員減少により解散の危機に瀕していることが挙げられ、史料の整理・目録化のノウハウが若い世代の研究者に受け継がれていない問題が危惧されている。どちらの課題についても、「私文書」と「公文書」は明確に区別できるものではないという点にも触れられていた。令和元年台風19号など自然災害による地域史料への被害についてレスキューが必要になったが、私文書だからレスキューできないと捨て置くことはできなかった。また、古文書の流出・散逸についても私文書に限ったことでなく保存・管理されているはずの公文書がオークションに出品されている事例も存在した。公文書というものがどういったものなのか漠然としたものであったが、「主権者である市民が主体的に利用できる公共の文書もろもろ」が公文書等であるという理念から、単に行政文書とittedだけでなく、地域史料も含めての保存が必要であると強く感じられた。これまで成り立っていた物事が当事者や社会の無関心によって崩れてしまうということは他人事ではなく、文化維持発展のために当事者意識を持ち周囲への理解を求めることの重要さは共通なのだと感じた。

2-3. 「公文書館法」制定の意義と地域資料

公文書館法では、公文書等を歴史資料として保存し利用に供することの重要性について述べられているが、ここでも公文書に限らず「その他の記録」を含んだ「公文書等」という言い回しがされている。「その他の記録」には古文書その他の私文書も含まれ、公文書でないから保存の必要がないわけではないことを示している。長野県では戦前から地域史料の散逸に危機感を持っており、様々な取り組みを行っていた。戦前は主に長野県史編纂に伴い県外に流出した中世文書の収集を、戦後は近世の地方文書の収集と、公文書の管理のための文書館の設立を目指し、平成4年に複合館として県立歴史館が設置された。公文書館数が全国一の長野県がどのように史料の収集保存を行ってきたかの流れを学ぶとともに、これほど力を入れていても保存しきれず散逸して

「信州 知の連携フォーラム(第5回)」参加報告『信州の未来を担う世代に、地域資源(史資料)の大事さ・魅力をどう伝えるか』

いくものがあることに驚いた。そもそも、公文書や図書資料、民間資料などは、文化財や文化遺産に含みづらく、県の文化政策として「地域資源」「公共財」としてトータルに保全していくためのセーフティネットを構築していく必要がある。そのために、公文書館に限らず知の連携に参加する図書館・博物館・美術館などの文化施設、ひいては学校の資料室や公民館活動などの協力が必要になる。

2-4. デジタル化の功罪

コロナ禍において様々な分野でデジタル化が進んだが、現状ではインプットとアウトプットのバランスが取れているとは言いづらい。単に史料の写真を掲載することでデジタル化が済むというわけではなく、必要な情報を網羅した目録が必要となってくる。例として、デジタル公開されている明治の村絵図データベース¹⁾について、約1000点の絵図それぞれに28項目の詳細なデータが付随していることが挙げられた。目録化の重要性は信州大学附属図書館が主催した第3回フォーラムでも触れられており、デジタル化に限らず史料の保存と利用に不可欠であることが再認識できた。

2-5. 地域資源を守るための「処方箋」

史料を保存し、活用できるように整理する必要があるが、現状で様々な課題があることも紹介された。表に見えてこない課題として史料購入における資金的な問題、整理に必要な人的問題、収蔵スペースのオーバーフローという空間的な問題が挙げられた。これらに関しては程度の差はあれ図書館やほかの文化施設にも存在する問題であり、一朝一夕に解決できるものではないと感じた。

地域資源の保全にあたっては、課題解決のために「短期的な取り組み」と「長期スパンでの取り組み」を両輪として行っていく必要があり、どちらか片方が欠けてもうまく進められない。短期的な取り組みとして、文化財防災ネットワークによる文化財レスキュー、史料の所在情報の見える化を図り所蔵者や他の文化施設との協力による平時からのチェック、インターネット上や関係機関間での情報共有や寄贈・寄託史料の受け入れによる「散逸史料」セーフティネット作りの3点が挙げられた。長期スパンでの取り組みとしては、古文書の公共財としての価値を市民と共有する取り組み、地域史研究者や市町村史編纂の関係者など地域史料に目配りできる人々との連携、地域の歴史好きを増やし地域史研究の層の拡充を図った若手の育成、史料の現地保存が困難になった場合に所蔵者が寄贈寄託の相談ができる体制づくりの4点が挙げられた。長期スパンの取り組みでは、地域史料の価値を知ってもらうことを重要視しており、古文書愛好会の活動支援やブログやメールマガジンなどによる情報発信を行い古文書にかかわる人々の裾野を広げることが目的とされている。特に、若者の育成に力を入れており、小中学生を対象にした出前の歴史講座や中高生から大学生を対象としたティーンズ古文書講座を実施し、地域資源の将来の担い手づくりを行っている。

3. こどもたちに地域の歴史を伝えたい ～おでかけ歴史館

3-1. おでかけ歴史館事業の概要

「おでかけ歴史館」とは、歴史館職員が収蔵史資料とともに県内の学校や公民館を訪問し、小中学生に体験学習を実施する事業である。学校からの要望によっては後述の体験学習プログラムに限らず、特別授業を行うこともある。長野県の歴史に関するこどもたちの理解を深め、県民の文化振興に寄与することを目的としている。訪問は、地理的に離れている諏訪以南（諏訪・基礎・上伊那・下伊那）の地域が対象である。来館のためのバスのチャーターが難しい少人数の学校にとっては、職員の訪問で体験学習が可能になるという利点もある。また、学校や公民館の他にも、博物館・資料館、児童センター等でこどもが参加する行事であれば、柔軟に対応している。

例年、4月末～7月に歴史館への学校見学が集中するため、おでかけ歴史館は10月～3月で実施している。ただし、2021年度はコロナ禍の影響で修学旅行等の行先が県内になり、10月も学校見学の申込みが続いているため、おでかけ歴史館も学校見学の間を縫って出かけている状況である。なお11月のおでかけ歴史館の予定については、10月に県内の感染警戒レベルが下がったことを受け、すでに予約でいっぱいとのことであった。

3-2. 体験学習プログラム

体験学習には、「土器や石器にふれよう」、「縄文人になろう」、「県立歴史館まるごと体験」、「ペーパークラフトで土器をつくろう」などのプログラムが準備されている。いずれも考古史料を見たり触ったり、自身の手を動かして学習できることが特徴である。

「土器や石器にふれよう」で行われているように、フォーラム当日も土器に触れる時間が設けられた。参加者が本物の縄文土器と弥生土器を持ち上げるという体験である（図1）。見た目にも違いはあるが、持ってみると縄文土器に比べて弥生土器が軽いことに驚いた。重さの違いの理由としては、後世になるほど技術の蓄積により薄く焼けるようになったためと説明があった。このような知識を紙面上で学ぶだけでなく、体感を伴って記憶に定着させることができるのは、本物を用いた体験学習の有意義な点だと感じた。



図2 縄文人に扮する



図1 縄文土器と弥生土器に触れる

「縄文人になろう」では、縄文人に扮したり（図2）、弓矢や黒曜石を使ってみることができる。黒曜石と普通の石とで紙を切る体験を行うと、普通の石では全くうまく切れず、黒曜石の切れ味がよく伝わるとのことだった。

「県立歴史館まるごと体験」は、常設展示の画像を見ながら展示解説を行うというものである。現在コロナ禍の影響で、館内で密になりうるコーナーの解説には事前にDVDを見てもらっているが、このDVDを訪問時

「信州 知の連携フォーラム(第5回)」参加報告『信州の未来を担う世代に、地域資源(史資料)の大事さ・魅力をどう伝えるか』

にも流用している。

「ペーパークラフトで土器をつくろう」の作品は、フォーラムでもステージ上に並べられた(図3)。縄文土器を観察した後、用意された定型の用紙に色を塗り、切り取って組み立てるというもので、学年に応じた難易度のペーパークラフトが準備されている。なお、サンプルは職場体験学習の中学生に作成してもらっている。大人でもやってみたくなる、工夫のしがいがある作品だという印象を受けた。



図3 縄文土器のペーパークラフト

その他にまだ実施例がないものの、「古文書に親しもう」として、職員が古文書とともに訪問し、扱い方や読み方などを分かりやすく解説するプログラムも用意している。

3-3. 特別授業

地元の素材を用いた歴史の授業を小学校6年生を対象に45分間でしてほしいという要望に応え、職員が講師となり特別授業を行った例もある。申込みを受け、その地域にゆかりのある武将を調べた所、木曾義昌という人物がいることが分かった。木曾義昌は、小学校の歴史教育で必ず取り上げられる織田信長、豊臣秀吉、徳川家康とも関係があり、戦国時代の様子を伝える内容の濃い授業になったとのことであった。木曾義昌は有名であるが、木曾義昌はこの特別授業がなければ知らない児童が大半なのではないか。その意味で、何もしなければ地元の武将について関心を持たなかった子どもたちに興味を持つ機会を作った授業であると言える。また、「歴史」という科目は敬遠されがちだと今回の講演で聞いたが、地元の武将を通して学ぶことで、歴史が自身と繋がったものとして感じられ、身近なものと感じやすくなるのではないかという印象を持った。

3-4. 他機関との連携

最後の質疑応答で、訪問の際に地域の公共図書館と連携し、図書館が所蔵する関連本の紹介などもできるといいのでは、という提案があった。これに対しては、これまでもおでかけ歴史館のイベントに合わせて公共図書館に史料を貸し出して展示を開催したことがあり、今後も館種を越えた取り組みをしていきたいという頼もしい回答が聞けた。大学生は、おでかけ歴史館の対象年齢外にはなるものの、大人向けの出前講座も行っているということなので、大学図書館でも本物に触れられるイベント等を開催できると嬉しい。

4. まとめ

今回の講演では、地域資源の有用性を発信している事例を学ぶことができた。いずれの講演で

も参加者が体験できる時間が設けられ、実物に触れることで深く理解しやすく、記憶に定着しやすくなることを感じた。また、歴史館が「実物・本物を持っていること」が大きな利点として挙げられており、実物に触れて体験することの重要性は繰り返し述べられた。

附属図書館や大学史資料センターも多くの史資料を所蔵しており、それらの中にも地域に関係するものがあるため、地域資源として史資料を活かす方法を考えるうえで参考になるフォーラムだった。

注

- 1) 長野県明治初期の村絵図・地図アーカイブ
<https://www.npmh.net/ezu/> (参照2022-1-13)